

みずばやしした 水林下遺跡

遺跡番号	461-078
調査次数	第1次
所在地	山形県飽海郡遊佐町吹浦字水林下地内
北緯・東経	39度06分19秒・139度52分53秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所
起回事業	一般国道7号遊佐象潟道路
調査面積	1,460㎡
受託期間	令和2年4月1日～令和3年3月31日
現地調査	令和2年6月30日～11月27日
調査担当者	氏家信行（現場責任者）・渡辺和行
調査協力	遊佐町教育委員会・地域生活課・山形県庄内教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	旧石器・奈良・平安・中世
遺構	掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱列・柱穴
遺物	石器・土師器・須恵器・陶磁器・木柱（文化財認定箱数：8箱・木柱2本）



遺跡位置図（1：25,000）

調査の概要

水林下遺跡は、県の北西端にある遊佐町の^{めが}女鹿地区に所在し、女鹿集落から直線距離で東へ約250mの小高い山中に位置する。標高は22～23mを測る。この場所は、鳥海山の国定公園内にあたり、現在は杉林となっているが、昔は田畑として利用されていた。東に鳥海山を望み、西には日本海が広がる。

調査は、農道の関係から調査区をA～C区の3つに分けてA区から開始した。最初に重機で遺構が確認で

きる深さまで表土を除去し、手作業で土を削り遺構を検出した。その後、見つかった遺構を掘り下げ、土層断面や平面、遺物の出土状況などを図面や写真に記録して完掘した。

A区の調査終了後のB区の調査中に、旧石器時代のもものとみられる石器がB区から出土した。そこで検証した結果、B区内に旧石器時代の存在が明らかになり、調査が必要であると判断された。これは、当初計画に無かったことから、協議を行った結果、今年度はA・B（旧石器含む）区の調査及びC区の西半分の遺構確認までを行い、C区の調査は令和3年度に行うことになった。

旧石器時代の調査は、上面の遺構の精査と記録作業を終了した後に開始した。グリッドに沿って2m×2mを基本とする区画を適宜設定しながら、手掘りで丁寧に掘り下げて石器を検出していった、石器は全て出土地点を記録し、随時写真撮影を行い取り上げた。それと併行して、C区西部の表土除去と遺構検出作業を進め次年度調査のための全体写真と配置図を作成した。

遺構と遺物

今回の調査で見つかった主な遺構は、掘立柱建物跡と柱列跡の他に木柱が出土した柱穴などと、当初計画に無

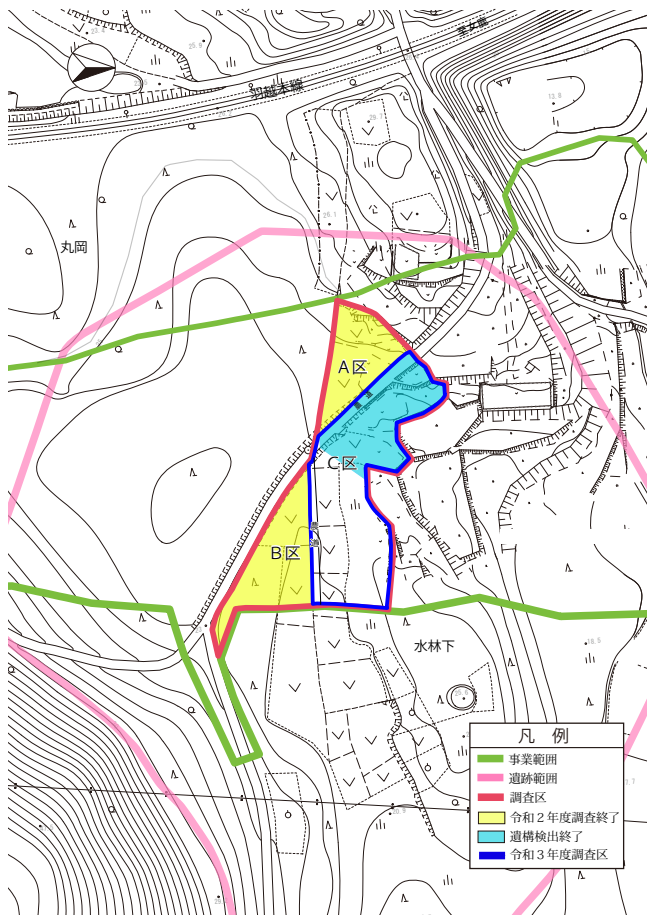


図1 調査区概要図 (1 : 2,000)

かった旧石器時代の痕跡である。

A区からは、木柱が出土した柱穴2基 (SP72・73) が見つかった。掘り方が大きく SP72 は 110cm × 80cm で深さ 80cm、SP73 は 100cm × 90cm で深さ 100cm を測る。出土した柱は径 30～40cm、長さは 70～80cm を測る。この2基の柱穴に繋がる穴は検出できなかったが、なにかの建物跡とも推測される。時期は穴の大きさから古代と思われるが、陶磁器の破片が出土していることから、中世以降の可能性もある。

B区では、掘立柱建物跡が2棟 (SB209・210) と柱列跡2列 (SA211・212) が検出されている。

建物跡は、2棟とも2間×2間の側柱の建物跡、柱列跡は直線状に4基の柱穴が並ぶ。柱穴が小さいことから小規模なものであったことが窺える。

遺物は、須恵器や土師器が多く出土し、他に木柱や石器、陶磁器などがある。

須恵器には蓋、坏、甕など、土師器は坏、甕、製塩土器がある。包含層からの出土が大半を占め、遺構からの出土は極めて少ない。土器の保存状態は悪く破片のみであったが、製塩土器の出土はこの地域で塩造りが行われ

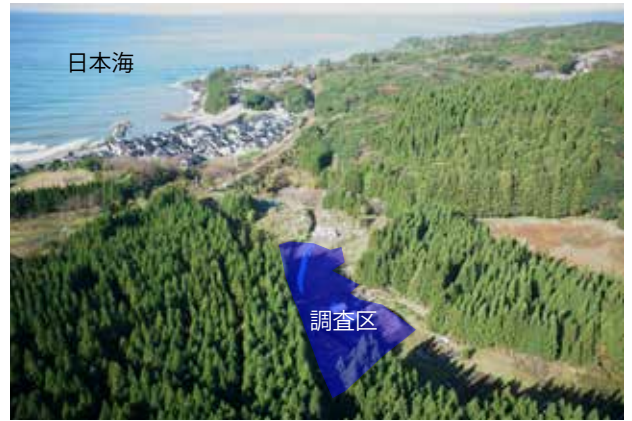


写真1 遺跡全景 (東から)



写真2 作業状況

ていたことを窺わせる。木柱は樹種や年代測定の分析に出すことで詳細が判明すると考えられる。

旧石器時代の石器は、B区の北西側を主に上層の遺構確認面直下のローム層から出土した。その範囲は面積約 50㎡で約 30cm までの深さとなる。状況は設定区画全体に石器は分布するが、南や東の端部になると希薄になる。北西隅に多くの石器が集中する場所があり、北側の次年度調査区へさらに広がるのが推察できる。

出土した石器は、製品 (tool)、^{さいへん} 破片、^{ほくへん} 剥片、^{せきかく} 石核などで総数 150 点を超える。その大半は破片と剥片であり、製品は台形石器2点と錐1点で他に、二次加工を施す剥片や使用痕がみられるものも数点含まれている。剥片には、接合するものもあることから、ここで石器の製作が行われていた可能性も考えられる。

まとめ

水林下遺跡は旧石器時代と奈良・平安時代、中世の複合遺跡である。

旧石器時代は、出土した台形石器などから、後期旧石器時代の前半期頃 (約3万年前) の可能性があり、接合資料などから、ここで石器が作られていたことも推測さ

れる。また、遺跡が海から直線距離で 500 m の場所にあることは、県内にある 133 箇所の旧石器時代の遺跡では希少な海沿いにある遺跡といえる。

奈良・平安時代の遺構では、掘立柱建物跡や柱列跡、柱穴などが確認された。製塩土器の出土は塩造りが行われていたことを想起させる。須恵器や土師器の特徴などから、9 世紀頃の集落跡と考えられる。但し、中世以降の陶磁器なども出土していることから、この時期の遺構も含まれている可能性がある。

次年度の調査で、さらに詳細が判明すると思われる。

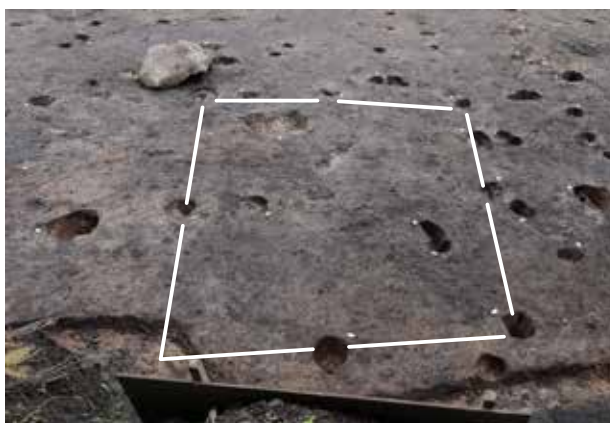


写真3 SB209 掘立柱建物跡 (南から)

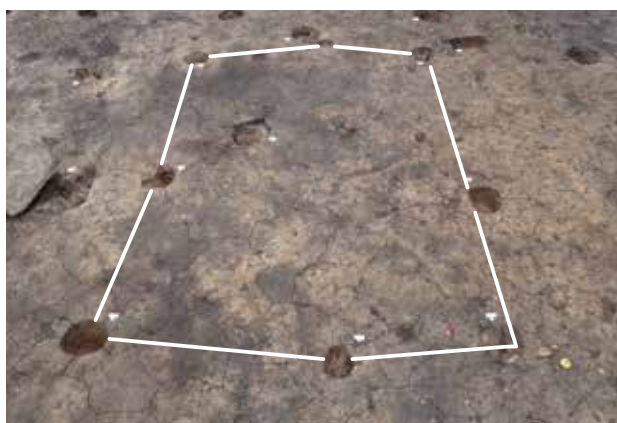


写真4 SB210 掘立柱建物跡 (西から)



写真5 SP73 の土層断面と木柱の出土状況 (西から)



写真6 平安時代の須恵器 (蓋・壺・甕)



写真7 平安時代の土師器 (坏・甕・製塩土器)



写真8 旧石器時代の石器 (碎片・剥片)



写真9 旧石器時代の石器 (台形石器・錐)

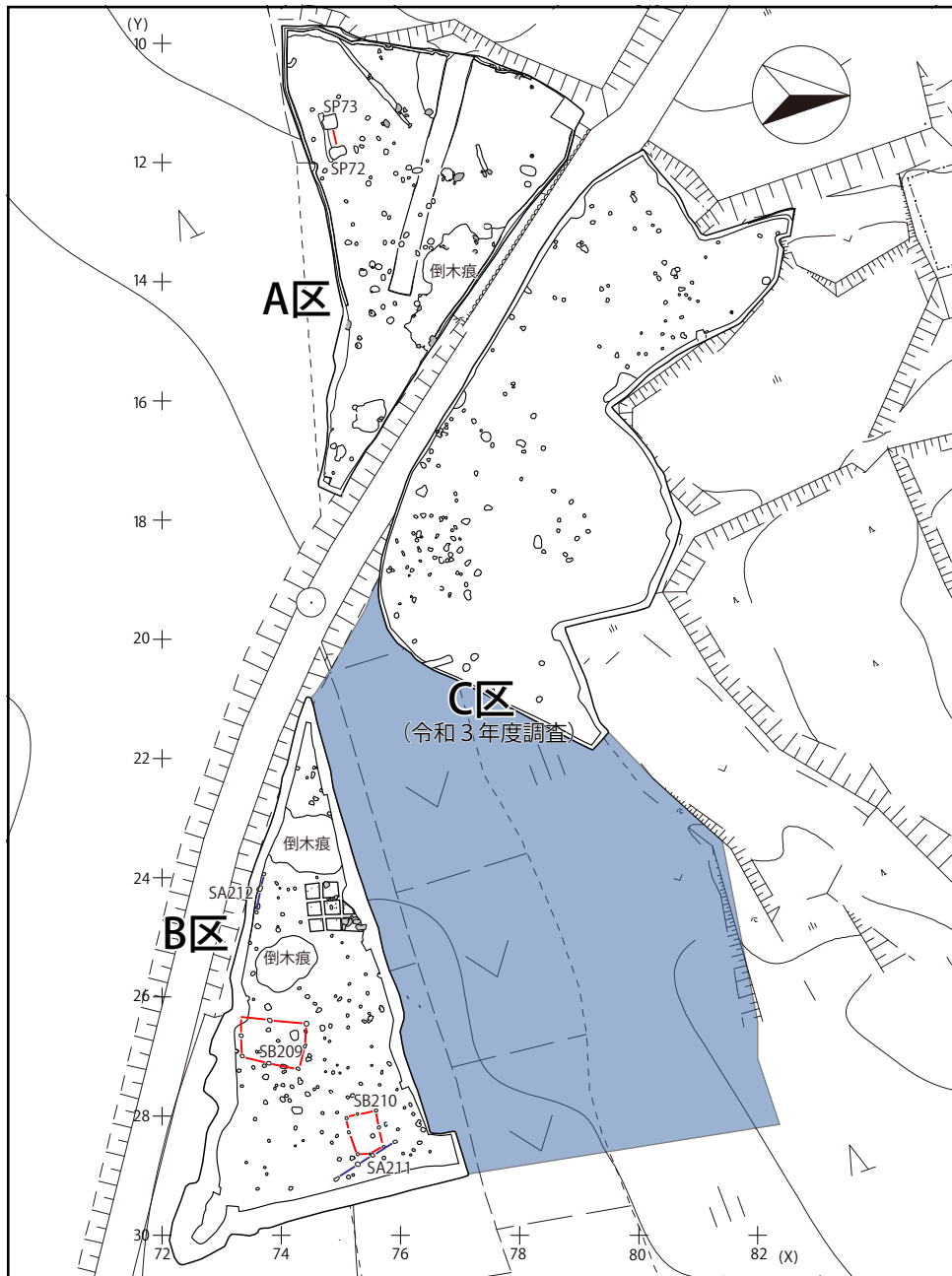


図2 遺構配置図 (1:500)



写真10 SA211 柱列跡
(南から)



写真11 SA212 柱列跡
(東から)



写真12 石器出土状況



写真13 石器出土状況

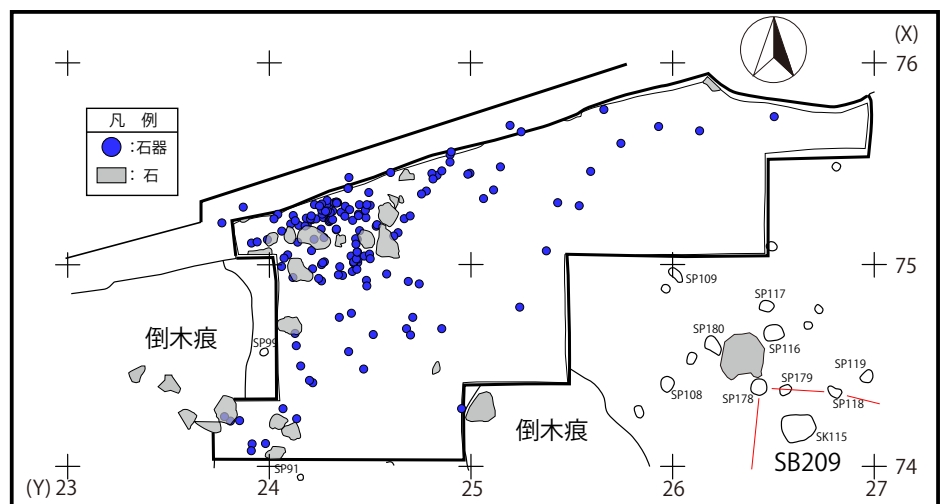


図3 石器分布図 (1:150)